

キューンとオンナツシュ —— 90年代カントの思索への視座⁽¹⁾

山根雄一郎 (大東文化大学法学部)

Die Blicke von Kühn und Onnasch auf den späten Kant

Yuichiro YAMANE

E.-O. オンナツシュは、2017年1月に一橋大学で行った研究報告「超越論的哲学の部分としての、イマヌエル・カントの移行著作」の導入部分で、次のように述べた。

カントの晩年の手書き遺稿は、彼の知的混乱の始まりが明らかに見て取れる産物だから、気遣い無用で棚上げして構わないと、通常は判定される。すでに90年代の半ばこのかた、カントの知的能力は、彼の自前の哲学が実際そうであるような極めて複雑な構築物をなお詳細に見通すには、もはや十分ではないのだとされる。[原注1] 言うまでもないことだが、問題は、そのような諸判定に従うなら、全般的には知的機能不全 *Geistesschwäche* の諸産物だと見なされることのない作品群をカントがまだ著した時期に、彼の知的機能不全は始まっていたと考えざるを得ないことである。カントの『人倫の形而上学』はそのような〔知的機能不全の〕一産物と見なされている。[原注2] 彼の最後の公刊著作である『実用的見地における人間学』〔以下『人間学』と略記〕は、1798年の初版が間違いや不合理な記述だらけであるにもかかわらず、同様の産物だと見なされることは少ない。最近、私は、1800年の〔同書〕第二版での変更ならびに修正のすべてがまったくカント自身の仕事に由来すると〔原注3に挙げた *Kant-Studien*, Bd.106, H.3 (2015) 所収の自論で〕示すことができた。[原注3] つまり、カントは、1800年の初めには、『人間学』の材料を見直し操作する上で、まだまったく十分な知的状況にあったことになる。⁽²⁾

「原注1」において、オンナツシュが論拠として（シュタルクの論考と並べて）挙げるのがマンフレッド・キューン著『カント伝』の第9章に相当する部分⁽³⁾であり、キューンはシュタルクと「同じく、衰弱 *Verfall* の始期を1796年と推定する」と、オンナツシュは注記している。当のキューン

は、同章冒頭(邦訳741頁)で、「毎日、またはほぼ毎日、カントと顔を合わせていた者には気づきにくかったであろう」カントの変調の鋭敏な観察者として、「ケーニヒスベルクの外に住み、この街には年に数回しかやって来なかった」ヤッハマンを挙げ、彼による1804年の回顧にある次の証言に注目する。すなわち、「もう8年も前〔すなわち1796年〕のことですが、私はカントの上に幾らかの変化が起こったのに気づきました。もっとも、自然の機能が順調に進行している日だけは、まだ全く同じ精神力を示してはいたのですが。しかしこのとき以来、カントの体力の減退は次第に著しくなってきました。……こうしてあの最も偉大な思想家の力は次第に衰えて、ついには精神力の完全な喪失にまで至ったのです。」⁽⁴⁾カントの最後の講義は結果的に1796年7月23日であった(966頁)。キューンは、「1796年の夏の初めには、彼〔カント〕は講義することができない状態になった」ことを、「老齢」・「体調不良」・「衰弱」のため講義できなかったとカント自身が3学期(すなわち96/97年冬学期・97年夏学期・97/98年冬学期)続けて大学文書に記した事実から推し量り、ヤッハマンの証言の信憑性を認定している(741-742頁)。

まず問題となるのは、こうしたキューン流の理解に「従うなら、全般的には知的機能不全の産物だと見なされることのない著作をカントがまだ著した時期に、彼の知的機能不全は始まっていたと考えざるを得ない」(が、これはおかしい)という、オンナッシュの異議である。言うところの「全般的には知的機能不全の産物だと見なされることのない著作」とは、例えば1790年春に公刊された『判断力批判』が該当しよう。キューンは、すでに『カント伝』第7章において、「60歳の初め」つまり1780年代後半のカントについて、「このときまでに、加齢のために健康がすでに損なわれ」「幾つもの病気に悩まされていた」ことに注意を向けている(610頁)。さらに、「実のところカントは1789年末頃に〔は〕健康上の「突然の変化」を感じ取って」おり(690頁)⁽⁵⁾、「長時間にわたって知的な仕事に集中することに困難を覚え始め」た(964頁)と、キューンは見ている。それゆえ、『判断力批判』のように「全般的には知的機能不全の産物だと見なされることのない著作をカントがまだ著した時期に、彼の知的機能不全は始まっていたと考えざるを得ない」(が)とするとしても、少なくともキューンの叙述に不整合は生じない。「カントの衰え〔decline〕を考慮に入れるならば、〔ケーニヒスベルク——訳者補記〕大学の学生とケーニヒスベルクに対する彼の影響がこの時期〔すなわち1789-90年頃〕に消失し始めたことは、多分驚きではないのだろう」(691頁)とも述べるキューンのカント像は、むしろ一貫している。なお、或る著作が「全般的には知的機能不全の産物だと見なされること」がない、とは、局所的には叙述の混乱が認められる可能性を示唆するが、『判断力批判』が実際にそうした事情と無縁でないことは、今世紀に入ってなおその本文の改訂が提案されている事実⁽⁶⁾からも伺える。

次の「原注2」でオンナッシュが参照要求しているのは、キューンの著作ではなく、『人倫の形而上学』の特に「法論」に関してカントのいわゆる老耄説を支持する論考(パウルゼンとイルティンク)である。しかしオンナッシュの実質的な主張はこうであろう。すなわち、『人倫の形而上学』が著者の知的機能不全の産物と見なされるなら、その翌年(以降)に出された『人間学』も同断であるべきだが、大方の評価は必ずしもそうでない以上、キューンによる「すでに90年代の半ばこのか

た、カントの知的能力は「[...] もはや十分ではないのだ」とする説は疑わしい、と。このオンナッシュの見方を共有しつつ、『オプス・ポストウム Opus postumum』（以下では適宜 OP とも略記）について、「思考に関して「麻痺したように」なった1798年以降には、彼〔カント〕は重要な内容を大して付け加えることができなかった」とするキューンの（典拠〔第9章注98、951頁〕を踏まえた）叙述（781頁）を問題視し、「1798年という論点は『道徳（人倫）の形而上学』や『人間学』などの場合にはほとんど問題にされていないのに対して、『オプス・ポストウム』のときにのみもち出されるが、それはいささか不公平だ」⁽⁷⁾とする意見も、最近になって出されている。

こうした批判的論評に対し、まず指摘できるのは、キューンは『カント伝』において（OPにだけでなく）『人倫の形而上学』や『人間学』にもカントの老衰の影を認めていること（758-759, 779頁を参照）である⁽⁸⁾。このことは、カントは1790年前後（60歳代後半）には知的な仕事に長時間集中することに困難を覚え始めていたのだとするキューンの前出の指摘を念頭に置くならば、むしろ自然である。『人倫の形而上学』と『人間学』を比較するならば、キューンの見るところ、「カントの講義の要約としてでさえ『人間学』は不完全な書物である。彼の主要な批判的著作のすべては講義に基礎を置いているが、著作におけるもろもろの論証は、学生たちが講義で接したであろうものからは、程遠い〔つまり精密である——訳者補記〕。このことはなお依然として、ある程度は『人倫の形而上学』にはあてはまるのだが、もはや『人間学』にはあてはまらない。」（779頁）このように、キューンは、上述のオンナッシュの見方とは逆に、『人倫の形而上学』よりも『人間学』のほうにカントの衰弱の現れを認めてすらいる。カントの衰弱は、1790年前後にまず本人に自覚され、90年代前半には「講義担当者としてやっていくのを深刻に阻害し始め」（689頁）、講義の断念に追い込まれた「1796年」以降は、近しい者の眼にも「次第に著しくな」り、著述活動に堪えるだけの「精神力」（知的能力）を保し得ない、「自然の機能」（睡眠など、755頁）の不順な日々が増加していった（741頁）、というのがキューンの見方の大筋である。

キューンが「1798年という論点」を取り上げるのも、恣意的ではなく、『カント伝』の展開を通じて周到に敷かれてきた伏線に沿うものである。直接的には、「ベルシュケは[...] 1798年7月にフィヒテに宛てて、カントは寄る年波のおかげで衰えに苦しんでいるかもしれないが、しかし「だからといって、カントの精神はまだ死に絶えてはおりません。なるほど思考を持続することはもはや意のままにはなりません。彼は主としてその記憶の豊かな貯えによってのみ生きております。とはいえ今もなお、際立った連想なり構想なりを練り出すことがしばしばあるのです」と書き送った」（748-749頁）との記述が、OPは「ベルシュケの主張したような、1798年という晩年においてなおカントに可能だった「際立った連想や構想」の一端である」（788頁）という評価を導いている。

つとにフォアレンダーも注意していた（第9章注47〔947頁〕）ことだが、カントは1794年以降、「自分の荷物をまとめること」、すなわち（これまでに）「書いたものを整理し」て作品化することを考えていた（754頁）。計画としては「少なくとも1767年にまで遡る」『人倫の形而上学』（1797年）と、「1772-73年冬学期に開講した」講義に由来する『人間学』（1798年）は、どちらもその成果である（755, 758-759, 776頁）。その際にカントが必要としたのは、新たな論点を哲学的に展開する、

相対的に高度な知的能力（OPの場合には当然これが問題になる）ではなく、書き溜められた諸断片を整理し一つの書物へと統合し編集するための、相対的には単純なそれであった。このことを考慮するならば、「1798年」という時点が含意する「論点」（すなわちカントの衰弱の深刻化）が、『道徳（人倫）の形而上学』や『人間学』などの場合にはほとんど問題にされていないのに対して、『オブス・ポストゥムム』のときにのみもち出される⁽⁷⁾のは、キューンにしてみれば別に「不公平」ではない。フェルスターがその主たる課題の「解決」（エーテルの「要請」）は「1799年に」属すると見（785頁）、かつ潜在的には完成済みだとまで言う（第9章注104〔951頁〕）OPの場合には、その直前にあたる「1798年」のカントの知的状況への注意を特に喚起することが、同年までに公刊に漕ぎ着け得た『人倫の形而上学』と『人間学』の場合とは異なって、意味をもち得るからである。

キューンの叙述によれば、これらの「刊行著作に新鮮な発想が含まれることはなかったから、それらは大方想定内のものだったわけだが、このことは、カントは往年の彼そのものではもはやなかったものの、かつてもっていた能力を発揮する瞬間もあった」というヤッハマンの観察と、完全に両立する。（755頁。傍点山根。）このキューンの所見は、本稿冒頭に引いた、「カントは、1800年の初めには、『人間学』の材料を見直し操作する上で、まだまったく十分な知的状況にあった」とするオンナッシュの主張を何ら否定するものではない。同様に、オンナッシュいわく「アディクセスが正しく述べるように、「どちらも総じてカントが生み出した最も精妙なるものに属する」ばかりか、ひょっとすると移行に関する諸問題について最も熟慮に富みかつ最上の仕方書かれた詳論であるかもしれない」OPの「第10・11束」が「1799年」に書かれた⁽⁹⁾のだとしても、それをキューンのいわゆる晩年のカントになお可能だった「際立った連想や構想」⁽¹⁰⁾の成果だとして説明することは、やはり可能であろう。実のところオンナッシュもまた、カントが「1798年」には「老いて朽ち果てた男の劣悪な健康状態」（XII 258. 同年10月19日付キーゼヴェッター宛書簡）にあったことは、確かに念頭に置いているのである⁽¹¹⁾。

オンナッシュは、後に言うところの「アルツハイマー病」を「多分、晩年のカントは罹患していた」⁽¹²⁾と明言し、それが発症していたことを暗示する状況証拠を、カントが1798年2月6日付書簡で伝えた相談に応じるべく医師フーフェラントが書き留めたメモに見える「老人の神経衰弱 Nervenschwäche des Alters」（XIII 475）という文言に求めているようである⁽¹³⁾。オンナッシュによれば、「通例ではこの病気の継続期間は約8年」である。とすると、「この病気の発症が人生の晩年であればあるだけ、認知能力は、年齢に相対的に、長く保持され続ける。なぜなら認知能力は、直線状に傾いて進行する〔つまり減衰する〕からである。」カントのように「高い知的能力をもつ患者」は、発症後しばらくの期間にあっても、そうでない患者よりも「ずっと大きな知的な貯えを意のままに駆使し得る」のであり、「従ってまた比較的長い期間仕事に従事し得る。」⁽¹⁴⁾ こういうわけだから、「1798年」のカントに著述上さしたる障碍はなかった、というのがオンナッシュの見立てとなる。

対照的なことに、キューンは具体的な病名に言及することには終始、禁欲的である。そもそも、

カントが罹患していたとオンナッシュが主張するアルツハイマー病（とその始期）にしても、オンナッシュ自らが「多分 *Allerwahrscheinlichkeit nach*」と留保する通り、それ自身、確定診断ではない。（よしんば病名に同意するとしても、その始期を、前引のヤッハマンの証言を根拠にカントの没する8年前の1796年に擬することは、果して絶対に不可能なのだろうか。）とすれば、例の1798年のベルシュケ報告（748-749頁）以後もカントには依然として「かつてもっていた能力を発揮する瞬間もあった」としつつ、しかし1799年以降「カントが没するまでに要したほぼ5年の間、その精神は間断なく衰弱し」、「衰弱の緩やかな過程こそが、まず彼から精神を、次いで肉体を奪い去った」（791頁）とするキューン描くところのカント像には、なお一定の整合性を認め得る、とするのが公平な読み方であるように思われる。

問題は、OPを、「批判哲学の諸論点を決してぶち壊しにすることのない」⁽¹⁵⁾ 行き届いた著述として見るか、それとも、「フィヒテの観念論」の語法に接近した前「公刊形態」であってカントの「最良の思考を表してはいない」と見る（788頁）か⁽¹⁶⁾、といったOPの位置づけにも関わり得るが、そのことの精査には、キューン著『カント伝』の吟味に特化した合評会とはまた別の機会を要するであろう。

【注】

邦訳『カント伝』（下の注1を参照）に言及するか同書より引用する場合は、原則として単に訳書本文の頁数（注の場合は注番号とその頁数）のみを記して該当箇所を指示する。いわゆるアカデミー版カント全集（*Kant's gesammelte Schriften*）から引用する際は、その巻数と頁数をローマ数字とアラビア数字で併記して出典箇所を示し、隔字体による強調箇所は傍点により示す。引用中の〔 〕は、特記なき限り引用者による補入を示す。年号等の漢数字表記はアラビア数字に改めて引用する。

- (1) 本稿は、カント研究会第319回例会（2018年8月26日、於法政大学大学院棟）の枠内で実施された『カント伝』（マンフレッド・キューン著、菅沢龍文 / 中澤武 / 山根雄一郎訳、春風社、2017年。原著はKuehn, Manfred, *Kant. A Biography*, Cambridge 2001）合評会における同題の報告原稿に加筆修正を施してなったものである。
- (2) Onnasch, Ernst-Otto: „Immanuel Kants Übergangswerk als Teil der Transzendentalphilosophie“, Ms., S.1f. 訳文は拙訳だが、原文と同時に会場で配布された、エルンスト＝オットー・オナッシュ（中澤武訳）「超越論的哲学の部分としての、イマヌエル・カントの移行著作」をも参照した。以下同様。
- (3) オンナッシュは原著（上の注1を参照）のドイツ語版（Kühn, Manfred: *Kant. Eine Biographie*, übers. v. Martin Pfeiffer, München 2003）に拠り、その「447頁以下」を指示している。
- (4) ヤッハマンの証言は芝罘訳に拠った（第9章注1〔945頁〕）。
- (5) 「突然の変化」についてキューンが第8章注115（937頁）で挙げる典拠は1791年9月21日付の

ラインホルト宛カント書簡(XI 288)である。カントは其中で、「自分の健康上の〔…〕突然の変化 mit meiner Gesundheit ... eine plötzliche Revolutionが、2年ばかり前から [s]eit etwa zwei Jahren 生じた」ことを告白している。これを文字通りに受け取るなら、1789年9月頃に、カントの「頭脳労働のための準備は〔…〕大きな変化を余儀なくされた」(ebd. キューン邦訳 690頁に引用あり)ことになる。それは、カントが『判断力批判』への「第一序論」に携わっていたと見られる時期に重なり得る。と言うのは、ヒンスケの見方によれば、「その執筆時期 Abfassungszeit はなおさらに数箇月遡り得る」「第一序論は、遅くとも〔1789年〕9月には書き下ろされていた niedergeschrieben worden ist と推定され、どうやら10月初めにはもうすでに〔キーゼヴェッターの手で〕写本が作られていたらしい」からである(vgl. Hinske, Norbert: „Zur Geschichte des Textes“, S. III u. VI, in: Kant: *Erste Einleitung in die Kritik der Urteilkraft. Faksimile und Transkription*, hrsg. v. N. Hinske u. a., Stuttgart-Bad Cannstatt 1965)。伝えられる写本に見られる通り、カントはそこにさらなる加筆修正を試みているが、「第一序論」は「十中八九、1789年秋に仕上げられた fertiggestellt」とするバルトゥシャットによる最近の解説もヒンスケの見解と平仄が合う(vgl. Bartuschat, Wolfgang: Art. „Erste Einleitung in die Kritik der Urteilkraft“, in: Marcus Willaschek u. a. (Hgg.): *Kant-Lexikon*, 3 Bde., Berlin/Boston 2015, S.570-572, hier: S.571 [Bd.1])。周知のようにカントは、「第一序論」を『判断力批判』の一部とすることを結局見合わせることになるが、1790年3月25日付と見られるキーゼヴェッター宛書簡(vgl. Kant: *Briefwechsel*, Auswahl und Anmerkungen von Otto Schöndörffer, bearbeitet von Rudolf Malter. Mit einer Einleitung von R. Malter und J. Kopper, Hamburg ³1986, S.941. この書簡は1964年に初めて公刊された。)において、「第一序論」には「明確さ Deutlichkeit」が不足していたことを仄めかしており、これこそカントが「第一序論」を放棄した「本質的理由」ではなかったかとクレンメは見ている(vgl. Klemme, Heiner F.: „Einleitung“ zur Ersten Einleitung in die *Kritik der Urteilkraft*, S.476, in: Kant: *Kritik der Urteilkraft. Beilage: Erste Einleitung in die Kritik der Urteilkraft*. Mit Einleitungen und Bibliographie hrsg. v. H. F. Klemme. Mit Sachanmerkungen von Piero Giordanetti. Hamburg 2009)。この「明確さ」の不足は、「カントが「第一序論」を比較的早くに、いずれにせよ『判断力批判』の主たる本文との取り組みを終えるに先立って、脱稿したという事情」(ebd., S.477)によるところが大きいのは無論だが、「明確さ」の点で不十分だったと思しき「第一序論」の成立過程が、カント自身が「自分の健康上の〔…〕突然の変化」が生じたとする時期にも重なるかに見えるのは、興味深い。なお、オンナッシュは、「第一序論」の成立に関して別の見方をとっているようである(vgl. Onnasch: a. a. O., S.9, Anm.33)が、ここで立ち入ることは控える。

⁽⁶⁾ クレンメの校訂になる最新の哲学文庫版『判断力批判』(上の注5にて言及)では、近年の研究を反映させる形で本文の3箇所が改訂された。同書の „Vorwort“(S.[XV])を参照のこと。

⁽⁷⁾ 加藤泰史『『オプス・ポストゥム』のコンテクスト——遺稿著作はカント最晩年の思想か?』、牧野英二編『新・カント読本』2018年所収、254頁。

- (8) この論点とは別に、合評会当日には、『カント伝』第1章から第3章までを担当した書評者より、「さらにキューンが、カントは敬虔主義との出会いから、「概念的にはほとんど何も学ぶことができなかつた」(同上〔102頁])と言うのは、完全な間違いと言っていい。前批判期から最晩年まで、カントの使う概念への敬虔主義の影響は、それを知る者には明白である」(山下和也「マンフレッド・キューン『カント伝』書評」〔当日配布された読み上げ原稿〕4頁)との否定的論評も提起されたが、キューンの当該引用部分は、正確には、「カントは、敬虔主義とのこのようなきわめて早い時期の出会いから、たとえいったい何であれ、概念的にはほとんど何も学ぶことができなかつた」(傍点山根)であることに注意したい。キューンは、幼少期から青少年期にかけてのカントを取り巻いていた敬虔主義の諸要素が後年の彼の概念的営為である哲学の根本を規定した、とするような見方から慎重に距離をとろうとしている(以上でも以下でもない)ものと解される。成熟期の哲学において「カントが用いる宗教的概念」が「まさに敬虔主義的なもの」であるとしても、それらは、直ちに遙か以前の「フリードリッヒ学院とケーニヒスベルク大学における神学教育の成果」(山下和也「カントとシュペーナー——批判哲学と敬虔主義神学——」、日本カント協会編『日本カント研究』第20号〔電子版〕、2019年、118頁)であるわけではないのであり、壮年期以後のカントがあくまで「自分で考える」中で批判的な観点からそのつど捉え返し意味付与したものののだと、「自分の考え方に関して一個の性格を意識している人間は、この性格を生まれつき所有するのではなく、いつでもそれを獲得したのでもなければならぬ *muß ... jederzeit erworben haben*」という『人間学』の一節(VII 294. キューン邦訳 291頁。訳文は若干変更した。)を引用して特に注意を促すキューンであれば、考えるであろう。
- (9) Onnasch: a.a.O., S.2.
- (10) キューン自身は懐疑的であるものの、事実、カントの同僚ハッセは、「1801年」においてさえ、「彼〔カント〕の非凡な明敏さを証し立て、理解されるに値する聡明な洞察が、電光のように頭脳を貫いて閃くことも稀ではなかつた」と評している(第9章注128〔953-954頁])。
- (11) Onnasch: a.a.O., S.12.
- (12) Ebd., S.2f.
- (13) Ebd., S.3, Anm.8. オンナッシュは書簡の年代を「1799年12月」と記している。
- (14) Ebd., S.3.
- (15) Ebd., S.29.
- (16) ちなみに、キューンの考えでは、「カントを最良の姿で示している」著作は『人倫の形而上学の基礎づけ』である(548頁)。キューンはまた、『判断力批判』が占めるべき体系的位相に関して、「最後に現れ、カントにとって最も肝要だったのは、道徳哲学と政治哲学なのである」と評してもいる(778頁)。

(2019年9月26日受理)